来たるべき事柄- I
＜抜粋翻訳＞
https://ichthys.com/mail-Things-to-Come.htm#half_hour

質問 #2:
ボブ先生
　こんにちは。以前、モーセが岩を打ったことについて書かせていただきました。今回は艱難期についていくつか質問があります。もし私の言い方が少し懐疑的に聞こえるとしても、それは終末についてもっと明確に理解したいからです。私は自分の理解が正しいことを確認したいのです。また、私はジャーナリズムの経験があるため、多くの人よりも踏み込んだ質問をする傾向がありますし、食い違いや矛盾と思われるものを見つけた場合には、それを取り上げて検討しなければなりません。ですから、あらかじめお詫びしますが、これはすべて御言葉をよりよく理解しようとする私の探求の一環なのだということをご理解いただければ幸いです。私は、おそらくお分かりになると思いますが、私たちの父なる神をもっと深く理解したいと切に願っています。私は神があなたに与えられた知識に深く敬意を抱いていますが、いくつかの点についてあなたのお考えを伺いたいのです。クリスチャンとして、特にそれが私たちを正しい方向へ導くのであれば、質問することは大切だと思います。箴言 27 章 17 節に「鉄は鉄を研ぎ、人はその友の顔を研ぐ」とあるとおりです。アーメンでしょうか。

　まず最初に、黙示録 8 章 1 節の「半時間の静けさ」についてのお考えを伺いたいと思います(「小羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ばかり静けさがあった」/NIV 訳)。あなたはウェブサイトで、「第七の封印が解かれた時の天の半時間の静けさ(黙示録 8 章 1 節)は、艱難期の開始時点を春から秋へ移す半年間の猶予期間を意味する」と述べておられます。私の質問は、「なぜ半年なのか」ということです。あなたが書かれた説明は読みましたが、もう少し詳しい説明をお願いしたいのです。第二ペテロ 3 章 8 節を見ると、神にとっては一日が千年のようであり、千年が一日のようであることを私たちは知っています。「愛する者たちよ。この一事を忘れてはならない。主にあっては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである」から計算すると、半時間の静けさは神の時間尺度では厳密には 20.83333 年に相当するはずです。もちろん私は自分が何かを知っていると主張しているわけではありません。ただ、御言葉から学んだことを適用し、それだけを唯一の情報源として、御言葉の中に隠されている他の奥義を理解しようとしているのです。イザヤ 34 章 16 節を読むと、聖書を正しく理解し正しく解釈するためには聖書を探究しなければならないことが分かります。御言葉は神の御霊によってのみ、そして聖書を真剣に探究することによってのみ明らかにされるのです。

主の書を調べて読め。これらのものは一つも欠けることなく、その伴侶を失うものはない。主の口がこれを命じ、その御霊がこれらを集めたからだ。（イザヤ 34 章 16 節）

ですから、創造を見ると、それぞれの日が異なる時代を象徴していることが分かります（すなわち、アダムから主の再臨に至るまでの時代です）。そしてその対応関係の根拠として第二ペテロ 3 章 8 節があります。そうであるなら、なぜ天の半時間の静寂には同じ原則が適用されないのでしょうか。

第二に、14 万 4 千人が文字どおり 14 万 4 千人の選ばれた者たちを指している可能性はあるとしても、私はこれをもっと霊的な観点から理解すべきだと思います。神は霊であられるので（ヨハネ 4 章 24 節）、その御言葉もまた霊的です。「どうか、私たちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊をあなたがたに与えてくださいますように。また、あなたがたの心の目が開かれて、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒たちの受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものかを知ることができますように。」（エペソ 1 章 17-18 節）聖書を読むと、数字には大きな象徴的意味があることが分かります。特に黙示録の著者においてはそうです。私の NIV スタディバイブルによれば、注解者たちは次のように述べています。「旧約聖書の十二部族と新約聖書の十二使徒は、十二という数が教会、すなわち両契約に属する神の贖われた民を表していることを示している。14 万 4 千（12×12×10×10×10）のように十倍数を掛け合わせた数は、不特定だが非常に大きな数を示唆する。したがって 14 万 4 千は、歴史全体を通じた教会全体を表している可能性がある。」

あの人々がユダヤ人であると、どうして確信できるのでしょうか。なぜそれが「霊的イスラエル」、すなわち長子たちの長子について語っているのではないと言えるのでしょうか。キリストを信じる者は皆、長子だからです（ヤコブ 1 章 18 節; ローマ 8 章 23 節）。もしあなたの解釈が正しいなら、この集団に属する者たちに対して非常に限定的で、私は限定的すぎると思う条件を設けていることになります。聖書は譬えや象徴によって隠されているのですから、私たちは神の御言葉について完全に知っているとは主張できません。なぜなら私たちの理解は部分的だからです。

なぜなら、わたしたちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない。全きものが来る時には、部分的なものはすたれる。（第一コリント 13 章 9-10 節）

主が再臨されるとき、主は明白に語られ（ヨハネ 16 章 25 節）、聖書のすべての秘密と奥義を明らかにされるでしょう。七つの封印を解くにふさわしいのは主だけだからで

す。私たちが今知っているように、聖書のすべてはキリストの初臨と再臨を指し示しています。もし私たちが聖書をあまりにも字義的に読みすぎるなら、パリサイ人たちが陥った罠に陥ってしまいます。彼らは律法の文字に目を向け、律法の霊を見なかったために、メシヤを完全に見逃してしまいました。神は、ご自分の民を救うために、サタンがキリストの初臨、死、復活を妨害できないように、証しを封じられました（イザヤ 8 章 16 節）。それによってサタンが理解できないようにされたのです。誰でも聖書を手に取って文字どおり読むことはできます。しかし聖書は聖霊によって霊感された書物ですから、霊の目が開かれた者だけが理解することができます。私は神があなたに驚くべき霊的洞察力を与えておられると信じていますし、決してあなたをパリサイ人たちと比較しているわけではありません。これはすべてのクリスチャンが直面する危険なのです。ですから、私は 14 万 4 千人についてのあなたの定義に少し問題を感じたのです。ぜひあなたのお考えを聞かせてください。

私の質問によって少しでも気分を害されたのであれば申し訳ありません。御言葉と真理を求める私たちの探求が、あらゆる障壁を乗り越えることを祈っています。
キリストにあって。

返信 #2

これらは良い質問であり、もっともな質問でもあります。そして私はまったく気分を害していません。それどころか、クリスチャンが教えられたことを吟味し、ベレアの人々がしたように（そしてあなたが今しているように）、それらが「本当にそのとおりなのか」を聖書によって確かめることは非常に重要です。また、あなたの取り組み方もまったく正しいと思います。すなわち、一定の敬意をもって取り組んでいることです。キリストのからだの一員として、私たちは皆、お互いの奉仕について、この程度の敬意と「相手を善意に解釈する姿勢」を持つべきです（結局のところ、私たちは皆キリストのからだの一員として互いを必要としているのですから）。しかし同時に、自分の知性や常識、あるいは霊的責任を放棄してはなりません。ですから私は気分を害するどころか、疑問を持ちながらも同時に敬意を保てる人に出会うと大いに励まされます。これは簡単なことではありませんが、互いの霊的成長のためには必要な姿勢です。私自身も長年にわたり、イエスにある兄弟姉妹たちからの意見や観察、質問、そして愛ある批判から多くの益を受けてきました。

さて、あなたの最初の具体的な質問である「半時間」についてですが、まず最初に認めておかなければならないのは、これが「七千年の日々（Seven Millennial Days）」の解釈と同様に、一つの解釈であるということです。私はそれが正しいと信じていますし、実際、この問題について読み、研究すればするほど、その正しさへの確信は強まっています。しかし、それでもなお解釈であることに変わりはありません。

この解釈の背景は主として『サタンの反乱』シリーズ第 5 部で説明されています。そ

して黙示録 8 章 1 節の解釈を支える脚注が参照しているのも、そのシリーズの重要な箇所（特に第 II 部 8 節）です（リンク:「七日解釈の証拠」）。したがって、まだお読みになっていないのであれば、この議論のためにも、そこで提示されているかなり詳細な年代論の展開に目を通していただくとよいでしょう。そこで私が述べているように、艱難期開始時期についての推定は、「ある前提」に基づいています。その一つが、あなたが質問している点、すなわち、黙示録 8 章 1 節で言及されている「半時間」が半年を意味するという前提です。では、この主張にはどのような根拠があるのでしょうか。

まず第一に、黙示録を真剣に受け止め、聖書解釈学や預言についてある程度の経験を持つ者であれば誰にとっても明らかなことですが、この「半時間」は文字どおりの三十分を意味しているのではなく、もっと長い期間を表しているのです。「来たる艱難期第 3 部 A」での私の説明の主眼は主としてこの点に向けられています。というのも、この研究を読む一般の読者は（特に第 1 部などで示した解釈学的説明を踏まえずに、このシリーズを順番どおりに読んでいない場合）、短い時間単位がより長い期間を表すという考え方に最も抵抗を感じる可能性が高いからです。そのため、その概念を説明し、根拠を示す必要があったのです（したがって最初の脚注があります）。あなたの質問では、この点について私と同じ前提に立っていますので、ここでの半時間は何らかのより長い期間を指しているという点では一致できるでしょう。したがって、本当に残る問題は「それがどれほどの長さなのか」ということだけです。私は、創造の七日間が人類歴史の七千年を象徴していることは真実だと信じていますし、少なくとも私はそう確信しています。しかし同時に、聖書の象徴表現においては、一日が千年だけでなく一年を表すこともあるのです。その最も有名な例がダニエル書 9 章です。そこにある「七十週」、すなわち「七十の七」では、それぞれの「週」あるいは「七」、つまり「七日間の一組」が七年を表しています。そして、ダニエル書や黙示録を単なる寓話以上のものとして受け取る解釈者で、最後の「七」が患難期の七年間を表すと理解していない人を私は知りません。したがって、この預言において一日は千年ではなく一年に相当することは明らかです。そして艱難期の長さを扱う他の聖句を考え合わせれば、聖書が艱難期を測る際の標準的な尺度として一年を用いていることは疑いないと私は考えています。

さらに、これらの「日」はダニエル書の他の箇所では「時」とも呼ばれています（ダニエル 7 章 25 節, 12 章 7 節）。この「時」という表現は黙示録 12 章 14 節にも繰り返されています。一方、黙示録の他の箇所では同じ概念が文字どおりの月数で表現されていますが、それもまた三年半という考えと結びついています（黙示録 11 章 2 節, 12 章 6 節, 13 章 5 節）。時間（hour/一時間）が基本的な時間単位であることを考えるなら、黙示録 8 章 1 節において半時間を一年の半分、すなわち半年と解することは、それほど無理な解釈ではありません。特に、この「時間」は預言とその文脈に精通してい

る者なら容易に理解できる、非常に特定の時間単位を指しているはずだからです。確かに「一時間＝一年」が絶対確実な教義的真理だとまでは言えません。しかし、艱難期を測るために聖書が最も重要な区分として用いているのが年（あるいは「時」）である以上、別の尺度を採る解釈のほうに立証責任があるように私には思えます。第二に、この半年のずれは、この聖句がなくても予想できたはずだという点も、私は決して軽視できないと思います。私たちの主は春に十字架につけられました。なぜなら過越祭は春だからです。しかしユダヤ教の祭りの暦は、主が秋に再臨されることを事実上要求しています。というのも、再臨に関わる出来事（再臨の前、最中、そして後）を象徴する祭りはすべて秋の祭りの周期に属しているからです。したがって、艱難期の開始年と終了年が正確に何年であるにせよ、この証拠からすると半年の空白期間が存在しないということは考えにくいのです。最後に、ここで用いられている「半分」という言葉は非常に重要です。私の聖書預言と象徴に関する経験から言えば、何かが正確に二つに分けられる場合、それは曖昧な端数や適用の難しい期間や取るに足りない事柄を表している可能性は低いのです。しかし、旧約の祭りの周期――それ自体が預言的で未来を指し示すものでした――と暦を完全に一致させるための半年間の中断であれば、この解釈上の条件にまさにぴったり合致します。そして私がこれまで見聞きした他のどの解釈にもできない仕方で、それを説明できるのです。ですから、これは一つの解釈であることを私は率直に認めますが、以上の理由から私はその正しさを強く確信しています。

14 万 4 千人についてですが、聖書がある事柄を象徴的に表現していることは確かですから、聖書のすべてを絶対的に「文字どおり」に受け取るのは間違いでしょう（もっとも、「文字どおり」とは実際には何を意味するのかという問題もありますが）。実際、すべての翻訳は必然的に解釈です。なぜなら、ある言語の実質的な内容を、意味の損失や変質なしに別の言語へ一語一語そのまま移し替えることは不可能だからです。翻訳が一つの技術であるのと同じように、聖書解釈もまた一つの技術です。しかし、それは私たちが努力しなくてよいという意味ではありません。むしろ、あなたがしているように、また私もそうしようとしていることを理解していただけると思いますが、御霊の力によって全力を尽くし、できる限り正確に理解しようと努めるべきなのです。したがって、絶対的な「字義主義」は誤りです。しかしもちろん、過度の寓意解釈もまた誤りです。初代教会は何世紀にもわたってあらゆるものを寓意化し、その結果、聖書が実際に語っていることが何一つそのままの意味を持たなくなるほどでした。これは、ある解釈を否定したい人がよく用いる議論です。すなわち、「解釈 X は寓意的であり、『本文の素直な読み方』ではないから間違っている」とか、あるいは「解釈 Y は字義的すぎて、言葉の背後にある真理を考慮していないから間違っている」といったものです。実際には、聖書の正しい解釈のほとんどは、この両者をある程度含んでいます。なぜなら聖書の真理は、ほとんどの場合、その両方を含んでいるからです。どちらの方向にも行き過ぎる危険がありますし、その「配合」はどの文脈でも同じというわけではありません。私た

ちが目指すのは正しさです。しかし、その正しさを測ることは時に難しく、特に一つの聖句だけを取り上げている場合にはなおさらです。

ここで重要な余談を一つ述べておきます。ほとんどのクリスチャンにとっては、一つの聖句だけを試金石にするのではなく、その教え全体によって教える人を判断すべきです。一般論として言えばそうです。もちろん、この原則を超えて重要な問題もあります（たとえばイエス・キリストの人性と神性、そして救いのためにキリストとその救いの御業への信仰が必要であるということです）。しかし、本当に優れた教えの源が、教理上の極めて重要な点で異端的な背教に陥っている可能性は非常に低いですし、本当に悪い教えの源が、その支配的な誤りを補えるほど多くの真理を語ることもまずありません。ですから私の方針、そしていつも勧めていることは、人は良い真理の供給源を探すべきだということです。そして、もし牧師 Z が「非常に良く、聖書的で、たいていの場合かなり正確」であり、十分に霊的な糧を与えてくれるなら、そのような働きは大切にすべきです。もしその牧師がある特定の点で「間違っている」と思われる場合でも、その点は脇に置いておくよう努めるべきであり、比較的小さな問題のために交わりを断ち、その結果として良いものまで失ってしまうべきではありません。もちろん、実際にどのような割合なのか、そしてどこで線を引くべきなのかは、聖書によって養われ、祈りと黙想を通して御霊の力の中で導かれる個々の信者が判断しなければならないことです。

数字は聖書の中で象徴的に用いられることもありますし、代表的な意味を持つこともあります（たとえば「日」が「年」を表す場合など）。しかし、多くの場合——実際には多くの場合において——数字は文字どおりです。一般論として言えば、何かを純粋に象徴的に受け取るべき場合には、その方向へ導く何らかの手掛かりが与えられていることがよくあります。しかし私は、14 万 4 千人の場合に象徴的意味を示唆するそのような「手掛かり」や「鍵」を見いだせません。たとえば「一万の一万倍」のように「数えきれないほど多い」という意味を持ちうる表現が使われているわけではなく、むしろ非常に具体的で、しかも十分あり得る数が与えられています。すなわち、イスラエル十二部族それぞれから一万二千人です。一方で、この 14 万 4 千人は明らかに艱難期に殉教します（黙示録 14 章 1-5 節）。したがって、彼らが教会全体を表しているとは考えられません。彼らの殉教は、彼らの生涯と奉仕が私の提案している線に沿って進むことを示しています（リンク：「144,000 人」、「144,000 人の殉教」参照）。

私が思うに、多くの人がこの箇所を「霊的に解釈したい」と考える理由は主に二つあります。第一に、このすばらしい集団の一員になりたいという願望です。第二に、教会を新しいイスラエルとして理解したいという願望です。第一の点については、その気持ちは理解できます。しかし、それはこれらの節をそのまま受け取らない理由にはなりません。なぜなら、この奉仕に含まれる正確な十二部族を列挙するために、ここではかなりの紙面が割かれているからです。もし教会の理想的で均質な一体性が意味されているのであれば、これは奇妙なことです。聖書は系図に多くの時間を費やしています。系

図は興味深いとは限りませんが、常に重要です。ここは系図ではありませんが、この集団を数え上げ、その実体性を明確にするという点で、同様のことをしています。ですから、この集団を霊的な意味で理解すべきだと示唆するどころか、ここで与えられている詳細な記述は――創世記以来の聖書の慣例と一致して――彼らが節の述べるとおりの特定のユダヤ人男性の集団であることを示しています。思いつく限りでは、このように明確に区分された人々の集団について、これほど具体的な言葉が用いられながら、それが霊的な意味で理解されるべきだという並行例を聖書の中に見つけることはできません。他方、私が述べているように、聖書が人々や集団を列挙する場合は、どこでも「文字どおり」の意味です。そしてまた、教会が霊的に描かれる場合には、人種、性別、社会的地位を超えた一つの統一体として描かれます。反対側の立場には別の問題もあります。すなわち、この 14 万 4 千人を「歴史を通じた教会全体」と理解すべきだと示唆するものが、この箇所には実際のところ何もないのです。私はそのような解釈を聞いたことがありますが、文脈的にも新約聖書全体の中でも、その根拠を全く見いだせません。教会がイスラエルであるという問題については、私の聖書理解では、私たちがイスラエルを**置き換える**という意味で「霊的イスラエル」であるという考えを支持する箇所はありません（もっとも、これは非常に人気があり、私の考えでは潜在的に危険な思想であることは理解しています）。私たち異邦人はイスラエルという根に接ぎ木されており、ユダヤ人と異邦人が共にキリストの教会を形成しているのです。もしご希望なら、この問題についてさらに喜んで議論いたします。それまでの間、次のリンクをご覧になるとよいでしょう。「Who is true Israel?（真のイスラエルとは誰か？）」、「Are the Celts the Lost Tribes?（ケルト人は失われた部族か？）」、「Lost Tribes（失われた部族）」です。

あなたの前向きな言葉、前向きな姿勢、そして神の御言葉の真理全体を知りたいという願いに、改めて感謝します。あなたがおっしゃるとおり、主の真理があらゆる障壁を取り除き、私たちを主が望まれる場所へ導いてくださいますように。

私たちの愛する主であり救い主であるイエス・キリストにあって、

ボブ・ルギンビル